

## ぼくの元気なひいばあちゃん

羽田 晨之介  
はねだ しんのすけ

この前テレビを見てみると、「けんこう長じゅ」というテレビ番組がありました。そこに出ているお年よりの人たちは、八十才を過ぎてても、畑へ出て作物を作ったり、ダンス教室へ行ったり楽しんでおどったり、みんなとても元気そうでした。ぼくは、その番組を見ながら、ぼくのひいばあちゃんのことを思い出していました。ひいばあちゃんは、今年八十五才になります。でも、とても元気でぼくや妹がひいばあちゃんの家に遊びに行くと、いつでも、朝一番に起きています。そして、ニコニコ顔で、

「しんちゃん、おはよう。」

と、言ってくれます。ぼくは、ひいばあちゃんの家に行くと、なぜか分からないけど、ほっとした気持ちになります。ひいばあちゃんのニコニコ顔や声を聞くと、ひいばあちゃんの家に来たんだと思います。

朝起きるとぼくと妹、そしてぼくのお母さんの世話をしようとする、ハツラツひいばあちゃんの始まりです。好ききらいのある妹に、ちよっとでも、野菜を食べさせよう、サラダのキュウリの切り方を変えたり、食べやすい魚のに物を作ったりして、料理の工夫をしてくれています。

「しんちゃん、しつかり食べないと、大きくなれないよ。」

と言って、ぼくたちがいっぱい食べると、とてもうれしそうな顔をしてくれます。ぼくのお母さんは、ひいばあちゃんのまご

です。だから、大人になっても「まごは、かわいいものだよ。」

と言ってお世話をするのが大好きなようです。お母さんの好物も知っていて、ひいばあちゃんの家でくつろいでいるお母さんは、まるでぼくたちと同じ子どものようです。

この前、ぼくは、とう芸教室に行つて茶わんを作ってきました。こうしの先生は、

「大きいから、ラーメンでも食べられるね。」

と笑いながら、形の整え方を教えてくれました。その茶わんがやき上がったら、まっ先にひいばあちゃんの家へ持って行きます。そしてごはんをおなかいっぱい食べたいです。きつと目を丸くして、おどろくひいばあちゃんの顔が目にかびます。

ぼくは、今まで「生きる」と言うことについて真げんに考えたことはありませんでした。でも、ひいばあちゃんの家で過ごすことで、人が「生きる」「生きている」ということは、自分のためだけではなく、周りの人たちを幸せにしたり、パワーのおすそわけをすることだと思いました。ひいばあちゃん顔は、キラキラかがやいています。そんなひいばあちゃん顔を見てみると、ぼくもうれしくなってきました。だから、ぼくも命を大切にしよう、感じる心を大切にしようと思いました。

ひいばあちゃん、いつもありがとう。そして、いつまでも元気でいてください。